

国語 [201]

一次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

絵を鑑賞するのに大切なのは、なにかを学ぼうとしないことです。現代では美術は教育の**イッカン**として国の管理下に置かれています。だから、小学校のころから私たちは絵を学校の授業で習い、見方を教わります。でも、少し考えてみればわかりますが、これはちよっとおかしい考えです。

絵というのは、どこかの誰かが自分を筆やペンを使ってあらわした、いわばその分身です。同じ絵を描ける人は、世界中探してもどこにもいません。この意味では、絵は**唯一無二**なのです。

ところが、学校の教育は**唯一無二**のはずの絵を評価して優劣をつけ、よしとされる**モハン**にできるだけ近づけようとしています。最近ではそういうのを嫌って、自分を素直に出すのがよい絵だと教える流れもあるようですが、¹決められた枠のなかでこのことに変わりはありません。でも、もしも絵が誰かの分身であるなら、それに**優劣をつけること**などできっこありません。自分を素直に出すのがよい絵だといっても、そもそも、最初からよい絵もわるい絵もないのです。人によい人や悪い人がいるのは事実でも、そのひとの存在そのものがよかつたりわるかつたりすることは絶対ありません。

ちよっと話が大きさに聞こえるかもしれません。でも、絵が学ぶものではなく、それを描いた人の分身であるならば、絵によいも悪いもないのです。目の前にある絵は、「いまそこにある」としか言いようがない。「なんだ、この絵はヘタクソだから意味がない」とか、「この絵は〇〇風だからモノマネでしかないよ」とか切り捨てず、私たちは、その絵がいま疑いようもなく自分の目の前にあり、それを否定することは絶対にできない、というところから出発しなければなりません。こういう次元では、先生が都合よく指導したり、生徒が一生懸命学んだりできるようなことは、実はいつさいないのです。

では、どうすればよいのでしょうか。絵をまるごと受けとめることです。ひたすら感じ取ることです。でも、それはみがかれた感性を駆使するようなことではありません。どちらかといえば、なにも考えないというのが近いと思います。でも、無の境地で絵に接するというのも違います。そんなのではわけがわからない、と、こころで文句のひとつやふたつも出てきそうなので、もう少し詳しくお話ししてみましよう。

まず、人はなにも考えないということはできません。考えていないようでも、いろんな記憶や印象や思いや感情がゴチャマゼになって、決して**筋道立って**などいないでしょうが、なにかを考えてはいるのです。

ものを考えるとは、読書のように、決められた行ごとに文字を右から左へと追っていくものではありません。また、原稿用紙のマス目を一つひとつきれいに埋めていくようなものでもありません。だいいち、頭のなかには**頁もマス目もありません**。もつと**渾然一体**としています。それを誰かに伝えなければいけないときは、私たちは、それを本の頁や原稿用紙のマス目に沿って絞り出すように、なんとかきれいに整えて「出力」していきます。そうでなければ、ほかの誰かは、あなたの考えを知りことも読むこともできないからです。

そうすることで、頭のなかが整理されたり、自分で思ってもいなかったような発想が浮かんでくることもあるでしょう。それこそが、⁵書くことへの恵みです。だから、ときどき私たちは、そうして出力されたものが、最初から頭のなかにあつたかのように**カンチガイ**をしてしまいます。でも、当然のことながら、頭のなかが最初からそうなっていたわけではありません。逆に、書いたり読んだり**反芻**したりすること、⁶渾然一体としていた思いや感情や印象や考えの矛盾の「かたまり」のような豊かさが選別され、角を落とされ、成形されてしまうことも当然あります。これはある意味、とても惜しいことです。

なぜなら、そういう**腑分け**されていない「かたまり」のような状態も、立派な「思考」だからです。そして、創造的な飛躍やひらめき、天から降ってきたようなアイデアというのは、こうした「かたまり」の思考がふつふつと化学反応のようなことを起こして、自分でもわからないまま、その「すきま」からひよいと飛び出してきたものなのです。

ここで絵に話を戻します。絵というのは、実はこの「かたまり」としての思考に近い状態です。絵を描く人は、いろんなことを考え、感じ、思いながら絵を仕上げていきます。もちろん、その過程で時間は過去から現在、未来へと流れていきます。でも、完成した絵は、そうした時間をひとつの面のうえに圧縮した状態です。いわば過程が**シュウセキ**した「状態」です。だから、そういう「かたまり」としての絵を見るとときには、私たちもまたそれを「かたまり」として受け取る必要があるのです。

（植木野衣『感性は感動しない』より）

問一 二重傍線部 a と d について、漢字に直して記しなさい。

問二 本文を内容的に三つの大きな段落に分けるとすると、Ⅱ段落目とⅢ段落目はどこからか。その始めの四字を抜き出して記しなさい。

問三 波線部①②③の意味として最も適当なものをそれぞれあとの選択肢から選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|------------------------------|--|---------------------|
| ① 唯一無二 | | |
| イ 他にはない個性を持っていること | | ロ 並ぶものがないほど優れていること |
| ハ めったに大きく大切にされていること | | ニ ただそれだけの存在でほかにないこと |
| ホ 同等のものがなくもの珍しいこと | | |
| ② 渾然一体 | | |
| イ いくつかのものが組み合わせられて一つになっているさま | | |
| ロ いくつかのものがきちんとすみ分けられているさま | | |
| ハ いくつかのものが溶け合って区別がつかないさま | | |
| ニ いくつかのものが個々に乱雑に存在しているさま | | |
| ホ いくつかのものが対立しあって競い合っているさま | | |
| ③ 反芻 | | |
| イ 繰り返し記憶すること | | ロ 繰り返し考え味わうこと |
| ハ 繰り返し作り出すこと | | ニ 繰り返し整理すること |
| ホ 繰り返し選別すること | | |

問四 傍線部 1 「決められた枠」とはここではどういう意味か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---------------------------|--|
| イ 美術は人間性を高めるものとされていること。 | |
| ロ 美術は学校で学ぶものとされていること。 | |
| ハ 美術は優劣によって評価されていること。 | |
| ニ 美術はよい絵とわるい絵とで構成されていること。 | |
| ホ 美術は感性をみがぐ手段とされていること。 | |

問五 傍線部 2 「優劣をつけることなどできっこありません」とあるが、それはなぜか。次の答えとなる文の空欄に入る表現を本文中から十字以上十五字以内で探し、抜き出して記しなさい。

▼絵というのは、（ ）（ ）ので、そもそも評価できるものではないから。

問六 傍線部 3 「絵をまるごと受けとめる」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | |
|-------------------------------|--|
| イ 目の前にある絵を評価や学習をしないで受けとめること。 | |
| ロ 目の前にある絵を長い時間の経過のなかで受けとめること。 | |
| ハ 目の前にある絵を思考のかたまりとして受けとめること。 | |
| ニ 目の前にある絵をひたすら感性を駆使して受けとめること。 | |
| ホ 目の前にある絵をなるべく無の境地で受けとめること。 | |

問七 傍線部 4 「筋道立ってなどいない」とあるが、これを言い換えた九字の表現を本文中から探し、抜き出して記しなさい。

国語 [2011]

問八 傍線部5「書くことの恵み」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 頭のなかに最初から存在していた記憶や印象や思いや感情などが、原稿用紙に出力していく過程で、豊かに選別されて、誰にでも理解できるようになること。

ロ 頭のなかにある誰かに伝えたいという記憶や印象や思いや感情などが、原稿用紙に出力していく過程で、思ってもいなかった発想に変換されるということ。

ハ 頭のなかにある矛盾した記憶や印象や思いや感情などが、原稿用紙に出力していく過程で、矛盾のない形に反応して、自分でも認識できるようになること。

ニ 頭のなかにある過去の記憶や印象や思いや感情などが、原稿用紙に出力していく過程で、現在から未来への流れていく思考へと接続されていくということ。

ホ 頭のなかにあるゴチャマゼの記憶や印象や思いや感情などが、原稿用紙に出力していく過程で、きれいに整理され、新しい発想が生まれたりすること。

問九 傍線部6「とても惜しいこと」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 創造的なひらめきやアイデアが生まれる機会が失われてしまうから。

ロ 最初の思いとは正反対の方向の常識的な考えに統合されてしまうから。

ハ 矛盾が消されてしまい、読者を混乱させることがなくなってしまうから。

ニ 他の人の考え方に気に入られるような不安定な思考になってしまうから。

ホ 様々なことを考えたり感じたりしすぎて思考が十分でなくなってしまうから。

問十 筆者は絵を鑑賞する行為をどのようなものと考えているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 画家の人生や歴史的な背景などを考慮しながら、知識を踏まえて味わおうとする行為。

ロ 絵そのものと全身で向き合い、画家が制作中に生じた考えや思いを受けとめようとする行為。

ハ 画家が作品に表現しようとしたものを、感性をみがいてすべて理解しようとする行為。

ニ 頭の中の思いや印象や考えを一つ一つ整理しながら、文字に絞り出していこうとする行為。

ホ 画家の過去・現在・未来を順にたどりながら、想像をふくらませ見つめようとする行為。

二 次の詩を読み、あとの問に答えなさい。

はる

室生犀星

おれがいつも詩をかいていると

永遠がやって来て

ひたいに何かしらすつて行く

手をやって見るけれど

すこしのアとも残さない素早い奴^ぶだ

おれはいつもそいつを見ようとして

あせつて【A】を焼いている

時がだんだん進んで行く

おれの心に^{こゝろ}しみを遣^として

おれの【B】をいつもひりひりさせて行く

けれどもおれは詩をやめない

おれはやはり街から街をあるいたり

² 深い泥^{ぬいね}潭^{たん}にはまつたりしている

『愛の詩集』より)

(注) ※ 泥潭　ぬかるみのこと

問一 この詩の種類として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

イ 口語詩　ロ 文語詩　ハ 定型詩　ニ 自由詩

問二 一〜三行目の中に用いられている表現技法として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 直喩　ロ 隠喩　ハ 擬人法　ニ 倒置法　ホ 体言止め

問三 【A】に入れるのに最も適当な身体の一部を表す言葉を漢字で記しなさい。

問四 傍線部1「しみ」とあるが、これは何をたとえた表現か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 若さを失ったことに対する喪失感。

ロ 詩作を続けることに対する不安。

ハ 好機を逃したことに對する後悔。

ホ 馬鹿にされたことに対する不満。

問五 【B】に入る最も適当な一語を詩の中から探し、抜き出して記しなさい。

問六 傍線部2「深い泥潭」とあるが、これは何をたとえた表現か。次の中から適当でないものを二つ選び、記号で答えなさい。

イ 創作の苦しみ　ロ 理想の女性　ハ 人生の悩み　ニ 真実へのこだわり　ホ 過去の栄光

問七 この詩について説明した文として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

イ 絶望のふちにある「おれ」が、わずかな救いを求めて詩を作り続ける様子を淡々と描いた作品である。

ロ 詩人として成功したことのある「おれ」が、かつての成功をもう一度取り戻したいという思いを示した作品である。

ハ 周囲の期待に応えたいと思いつつ、応えられないでいる「おれ」自身を自虐的に表現した作品である。

ニ 詩の魅力に取りつかれた「おれ」が有名になるためにどんなことでもしようという強い決意を表した作品である。

ホ 詩人であり続けるために、もがきながら努力を続ける「おれ」の心情を描き出した作品である。

国語 [その二]

三 次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

那須高原で牧場を営む「高峰」は、十五年前に離婚した「美美子」のもとで育った息子「悠平」を牧場に迎えることになった。本文は、「悠平」を乗せた電車が駅に到着した場面である。

A 跨線橋を渡って、階段を人が下りてきた。三人、いや、四人だった。ジーンズに白いシャツを着た背の高い若者が一人混じっていた。大きなバックパックを背負っていて、右手にもバッグを下げていた。

四つのに別れて、息子の成長した顔は知らない。美美子からは写真も受け取っていない。が、自分の子供だ。会えば分かると、勝手に決めていた。しかし、あの若者なのだろうか。現実を眼前にすると、

① は持てず、出迎えの男はちよつと慌てた。

改札口の手前で若者はこちらを見たが、すぐに視線をそらす。幸運だったのは、それと思われる若い男が彼一人だったことだ。

息を吸い込み、相手が改札口を出たところで、声をかけた。

「悠平――」

若者は立ち止まり、一瞬の間があいた後、小さくうなずいて返してきた。

「よく来たな」

口が動いて何か言ったようだが、こちらの耳に聞こえてはこなかった。すぐ前に、こわばった若い男の顔があった。目は見開かれているが、視線は落ちつかずに揺れている。

細面の顔だちは、俺とは似ていない。美美子の父親がこんな顔だったか――一秒に満たない間に、そんなことを思った。

「車は、すぐそこに駐めてある。一つ持とう」

手を差し出すと、むこうは怖じ気づいたようにバッグを引っこめた。行き場を失った手が宙を彷徨い、それを引つ込めてから、高峰は「行こう」と、足を出口に向けた。

ダットサンのピックアップ・トラックは、駅の横手にある無料駐車場に駐めてあった。高峰が避けて歩いた水溜まりを、若者はジーンズの長い脚で跨いで越えた。

荷物は後部座席に置くように言うと、若者はそのようにし、無言で助手席に乗りこんできた。鈍い音をさせてドアが閉まり、沈黙が狭い空間の中で閉じこめられた。すぐにエンジン・キーを回して、ダットサンをスタートさせた。

B 東北本線と平行に走る道を少し行つて右折し、踏切を渡った。あとは那須の山並みに向かって、車を走らせる。

車内にはエンジンとエアコンの音が入りこんでくるだけで、会話はなかった。「疲れたか」「東京とは違うだろ」「那須岳のほうに向かっているんだよ」――言葉はいくらでも用意してきたが、口に出したとたん場違いになつてしまふ気がして、高峰は黙つて車を走らせた。血のつながった親と子だ。会つてしまえば、通いあうものがあるに違いないと考えていたのが、楽観的に過ぎたのか。現実は違つて、三十センチと離れていない隣に座っているのは、容貌も自分とは似ていないし、ひどく神経質そうでも喋らない若者である。

いったん国道4号線に入り、ほどなく左に曲がった。左折する時、一瞬、助手席にいる悠平の姿が目に入った。高校野球をやっていたにしては筋肉のついていない白い腕が、美美子の言っていた彼の生活⁴を物語っているようだった。

田舎道をさらに行くくと、緩やかな上り勾配が続くようになり、エンジンの音が高くなった。正面には、那須岳の顔である茶臼岳が薄青い山肌を見せている。山のことを訊かれるのではと②して、名前から標高一九一五メートルという数字まで用意して待っていた。東京从那須に来る者は、この場所⁵で十人が十人、正面にそびえ立つ山塊について問いかけをしてくる。だが、隣の若者は黙つたままだ。道の右側に荒れたサッカー場みたいな牧草地が現れた。速くにサイロや牧舎が見え、刈り取られた牧草がいくつも円筒形にロールパックされ、草の原に並べられていた。左にも牧草地が見えた。その時、助手席から短い言葉が聞こえた。

「牧場――」

【 イ 】
高くなったエンジン音にかき消されそうな細い声だった。甲高くもあつた。十九歳の男にしては幼く聞こえる声で、初めて耳にする成長した息子の声だった。

「そつ、牧場だ。那須のこのあたりは、酪農が盛んなんだよ」

しかし、会話はつながらず、悠平が再び言葉を発したのは、その先の牧場が見えてからだだった。

「あの白くて、大きなローラーみたいなやつ」

【 ロ 】
「サイレージだ。牛が冬場に食べるよう、機械で刈り取つた牧草をロール状にして、ビニールで包んだんだ。ビニールで密閉するのは、空気を遮断して、牧草を発酵させるためだな。早い話が、牧草の漬物物だ」

悠平が牧場のことに興味を持ったのかと思ひ、高峰の舌はつい滑らかになつて、相手の五倍ほどの言葉を一気に喋っていた。が、格別の反応はなく、助手席の若者はふたたび口を閉ざす。こちらも口を閉ざし、唾を呑みこむよりなかつた。

【 牛はいないの 】 少し行つて、思い出したように言葉が聞こえてきた。「どこの牧場にもいないし」

【 ハ 】

たしかに次々に現れる牧場に牛の姿はなく、緑い牧草地が海のように広がっているだけだ。

「いるさ。ただし、牛舎の中にね。このあたりでは放牧はやっていないんだ。いや、北海道を除けば、日本では完全な放牧はまず行われていない。それができるだけの広さがないからな」

【 どうして? 】 こんなに広いのに

【 牛はびっくりするほどたくさん草を食べるんだ。 】 放牧して好き放題食べさせると、草地があつという間に丸裸になってしまう。だから、草は成長させてから刈り取つて干し草にしたり、配合飼料と混ぜたりして、牛舎の中にいる牛に与えるんだ」

視野の端に映つた若者の表情が驟つたように見えた。都会から来た人間にこの話をすると、皆いちように③の顔となる。牧場では牛たちが悠然と草を食んでいるもの――だが、それは牛乳パックに描かれている世界であり、現実の日本ではあまり見るのできない風景なのである。

「しかし、うちの牧場では放牧をしている」

悠平の顔が、こちらを見た。

「自由に草を食わせてるんだ」

「だけど、今――」

その言葉には、まず小さく笑つて返した。

「まあ、見てみれば、わかるよ」

【 木 】

牧草地が途切れた先で、高峰はブレーキを軽く踏んだ。ハンドルを切り、左に折れる細い道にダットサンを進めた。車が一台通れるほどの幅しかなく、百メートルと行かないうちに舗装は終わつて、土と雑草の道になる。上り勾配がきつくなつて、道の両側は草原から木立に変わり、枝の間から漏れた夕日が目を射つた。目的地が近いことを悟つたのか、助手席の若者は再び口を閉ざしている。

毎朝、原乳を集めに来るタンク・ローリーが刻みつけた轍に揺すられながら、四輪駆動のピックアップ・トラックは進み、傾斜が緩くなつたところで、高峰は道脇のスペースに車を止めた。右手には、ログハウスが見えている。「いいだ」

サイドブレーキを引き、高峰は運転席から下りた。荷物も下ろさず、助手席から出てきた悠平はあたりを見ている。体を三百六十度回転させ、暗さを帯びてきた周囲の木立を見回して、口を開いた。

「どいこに牧場が――」

高峰は応じた。

「この山全体が牧場なんだ」

国語 [その四]

問一 二重傍線部 a・b の漢字の読みを、ひらがなで記しなさい。

問二 傍線部 1 「ジーンズに白いシャツを着た背の高い若者」とあるが、

- I この「若者」が高身長であることを高峰との比較によって示した一文を A 文中から探し、始めの五字を抜き出して記しなさい。
- II この「若者」に対して高峰が抱いた印象を含む一文を B 文中から探し、始めの五字を抜き出して記しなさい。

問三 空欄①く③に入る最も適当な言葉をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号を重ねて用いてはならない。

イ いらだち 口 関心 ハ 確信 ニ 期待 ホ 絶望 ヘ 判断 ト 憂うつ チ 落胆

問四 傍線部 2 「沈黙が狭い空間の中で閉じこめられた」とあるが、高峰が「沈黙」した理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ 会えば心は通いあうと考えていたが、現実には悠平と会うと、何を話したらいいかわからない気まずさを感じたから。
- ロ 自分の子どもだからと楽観していたが、現実には悠平と再会してみると、その態度がむしろ敵対的なのに驚いたから。
- ハ 血のつながった親子だと思っていたが、現実の悠平を見ると、顔も性格も自分に似ていないのでがっかりしたから。
- ニ 話しかける言葉はいくつも用意していたが、現実には悠平を目の前にすると、胸がいっぱいで何も言えなかったから。
- ホ 幼時から会っていないので覚悟はしていたが、現実の悠平に接すると、やはりすぐに打ち解けられなかったから。

問五 傍線部 3 「会ってしまったえば、通いあうものがあるに違いないと考えていたのが、楽観的に過ぎたのか」とあるが、二人の気持ちがかみ合っていないさまを表した一文を A 文中から探し、始めの五字を抜き出して記しなさい。

問六 傍線部 4 「美美子の言っていた彼の生活」とあるが、それはどのような生活だったと推察されるか。答えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ 大怪我をしたため、野球部の引退試合に出られず、それ以来家に閉じこもる日々を送っていた。
- ロ それほど活動的でなく、野球部に所属はしていたが、練習に参加せず名前だけの状況だった。
- ハ 体格に恵まれてはいたが、怠け癖がついて野球部の練習はせず、友達と遊び回ってばかりいた。
- ニ 人間関係がうまくいかず、野球部をすぐに辞めて、一人でトレーニングジムに通っていた。
- ホ 野球部に入っではいたが、選手として選ばれることはなく、いつも練習をするだけだった。

問七 傍線部 5 「十人が十人」と同じ意味を表す五字の言葉を C 文中から探し、抜き出して記しなさい。

問八 次の一文を入れるのに最も適当な箇所を本文中の【イ】【ハ】から選び、記号で答えなさい。

▼ようやく会話につながった。

問九 傍線部 6 「牛乳パックに描かれている世界」とはどのような「世界」か。答えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ 現実にはありえない牧場の風景を、あたかもそのとおりであるかのように作った世界。
- ロ 現実のどこかに存在する典型的な日本の牧場を、きわめてリアルに再現して見せた世界。
- ハ 現実の牧場をよく知る人でなければ見抜けない、うそで塗り固められた作り事の世界。
- ニ 牧場の現実をよく知らない都会の人々に広まっている、期待どおりのイメージの世界。
- ホ 牧場へ現実には足を運んだことのない画家によって、ほとんど空想で描かれたような世界。

問十 傍線部 7 「小さく笑って」とあるが、その理由を説明した次の文の空欄に入る語句を字数指定に従って C 文中から探し、抜き出して記しなさい。

▼（ ① 六字 （ ）であるため、（ ② 二十一字 （ ）が見られることを示せばきつと驚くだろうと思ったから。

問十一 高峰が息子を迎えるにあたり、準備していたこととして適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- イ 一般的な牧場についての説明 口 牛舎の中にいる牛を見せること ハ 到着時間前にトラックで迎えに行くこと
- ニ 那須岳の山々についての説明 ホ 出迎えてすぐにかける言葉

問十二 この文章では、階段を下りてきた若者が悠平だと高峰がわかった後も、作者は彼のことを「若者」と表したり「悠平」と表したりしている。そのような表現の特徴について説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ 高峰と悠平の会話がはずんでいる場面では「悠平」、それ以外では「若者」と、両者の使い分けは明瞭である。
- ロ 牧草地が現れるのを境として、そこまでは「若者」が、そこから先は「悠平」が圧倒的に多く用いられている。
- ハ 「悠平」と表す場合に比べて、「若者」は悠平がよそよそしい態度をとっている場合に用いられる傾向がある。
- ニ 悠平への親しみが次第に増していく展開と、「若者」から「悠平」への表現の転換とは明らかに関連している。
- ホ 「悠平」よりも「若者」の方が、高峰が悠平との距離が近くなったと感じている場面で用いられることが多い。

問十三 本文から読み取れる高峰の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- イ 最初は表情のない悠平のことを心配していたが、自然の中を走るにつれて生き生きした表情を取り戻したことに安心感を覚えている。
- ロ どんなに努力しても話は平行線をたどるだけで、悠平の関心がどこにあるのかいつつかめないことにいらだちを感じ始めている。
- ハ 最初は悠平が自分の仕事に興味をもってくれたと喜んでいたが、徐々に現実と掛け離れた世界に憧れていたただとわかり失望している。
- ニ どんなにあがいても空白の時間を埋められないことを実感し、別れてから妻に悠平の養育を任せきりにしてきたことを強く後悔している。
- ホ 最初は悠平にどんな言葉をかければよいかわからずとまどっていたが、車窓の風景をきっかけに徐々に会話の糸口をつかみかけている。

国語解答用紙

受験番号

氏名

合計

問一 a イッカン
b モハン

問二 c カンチガイ
d シュウセキ
い

問三 ①
問二 II
問三 III

問三 ②
問三 ③

問四

問五 (十五字分)

問六

問七 (九字分)

問八
問九
問十

小計

二 問一

問三

問六

問二

問四

問七

問五

小計

(折り線)

三 問一 a 勾配
b 滑らか
らか

問二 I

問三 ①
②
③

問二 II (各五字分)

小計

問四

問六

問八

問七 (五字分)

問九

問五 (五字分)

問十 ① (六字分)

問十一 ② (二十一字分)

問十一

問十二

問十三

(二十一字分)